

共に未来をつくる

— 大林組設計部のDNA — 『共創』によるものづくり

大林組設計部が掲げる『共創』とは、多様な価値観をもつ、クライアント、ユーザー、専門家、社内他部門と相互に理解し合い、互いの信頼に基づいて相乗効果的なコミュニケーションを繰り返しながら、共に考え、共に未来をつくることである。未来をつくるには、創造力と想像力が必要で、独創性が問われることにもなる。

産業用ガス検知警報機器の国内トップメーカーである理研計器と大林組の一連のプロジェクトは、まさにクライアントとの『共創』を体現している。理研計器との出逢いは14年前。北海道函館・戸井工場新築工事から今に至る、長く、深い縁のはじまりである。その後、本社テクニカルセンター(2007年)に続き、開発センター(2014年)の設計・施工を託され、さらには同社創業の地、板橋区小豆沢で新本社建築計画が現在進行中だ。一連のプロジェクトに込められた想いを、理研計器株式会社代表取締役社長・小林久悦氏と設計部・松岡兼司の対談から読み解く。

理研計器株式会社 開発センター RIKEN KEIKI INNOVATION CENTER

用途	研究所・工場
敷地面積	16,016.25㎡
建築面積	4,653.59㎡(施設全体)
延べ面積	15,441.05㎡(施設全体)
構造	鉄骨造
規模	地上5階・塔屋1階
工期	2013年11月~2014年9月(11か月)



時をともに。 そしてさらなる未来へ

はじまりは、 北海道の工場から

一理研計器とのおつきあいは、2003年の北海道函館・戸井工場新築工事からですが、その時当社は施工のみ担当し、設計には関わっていません。しかしその後、理研計器は数々の重要案件の設計・施工を大林組に託しました。ということは、戸井工場以降、当社に対する期待や評価が変わったのでしょうか？

小林社長 | 戸井工場は、当社の命ともいえるガス検知器の生産拠点として計画されました。当時私は製造部門の責任者としてこのプロジェクトに関わり、徹底して「その場を使う者の立場」から注文を出させてもらいました。また、北海道では雪の降る冬場は工事ができませんから、春から秋までの短期集中で計画を進める必要があります。こうした質的にも物量的にも高度な要求に対して、大林組がしっかり対応してくれたという印象の良さや、発注時の相談に対するレスポンスの早さなどが、次のプロジェクトとなった「本社テクニカルセンター」の依頼につながったように思います。

松岡 | 私が理研計器に関わるようになったのは、その本社テクニカルセンターからです。プロジェクトへの参画に先立って、北海道函館・戸井工場の見学もさせていただき、理研計器がつくっているガス検知器とは一体どんなものなのか、どのような環境で、どんな人がつくっているのかを学んできました。工場は口の字型に機械設備やクリーンルームが配置され、作業効率や動線が考え抜かれていることがよくわかるつくりで、なるほど、こういう機能性を求められる会社であり、現場なのだなと実感しました。

本当の『共創』を教えてください、 テクニカルセンターの記憶

一本社テクニカルセンターのプロジェクトが動き出したのが2005年から。小林社長は当時の松岡に、どのような印象をおもちでしたか？

小林社長 | いやあ、モノクロが好きなんだな、と(笑)。

松岡 | テクニカルセンターは1階が製造部門で、2階が研究開発部門でした。1階は大型機械も入るので天井を高くして開放感を強調したのですが、研究開発フロアは落ち着きを重視してモトーンの内装を提案しました。でも、「これじゃ気分が晴れないよ」と速やかに却下されました(苦笑)。

小林社長 (当時は取締役) のそうしたジャッジの早さ、明確さからもわかるように、「設計側におまかせ」という姿勢は全くありませんでした。とことん「実際に使う人の視点を交えて、一緒に考え、つくりあげよう」というスタンスで、定例の打ち合わせなどにも役員の方が積極的に参加してくださったのが、とても新鮮だったのを覚えています。

小林社長 | 使うのは自社の社員なのだから、役員が参加するのは当たり前だと思っていたので、そういうスタイルになりました。

松岡 | でも、実際にはそういうプロジェクトは少ないと思います。私自身もそれまでもいくつかのプロジェクトを手掛けていましたが、担当者レベルではなく、トップからダイレクトに厳しいご意見やご評価をいただきながら進めていく…という経験ははじめてでした。

小林社長 | 当時私は取締役でしたが、経営陣の仕事の主眼というのは、会社の方針・目標に対して社員が働きやすい環境をいかにしてつくり、整備するか、これに尽きるとしています。効率的で安全な職場も、高品質なものづくりも、業績アップも全てはそこから。戸井工場の頃から今に至るまで、想いは全く変わりませんね。

松岡 | そのお気持ちは、対面していてもとても強く伝わってきました。なにしろ図面を見せるとその場でコンソートの配置まで細かな指示が入ってくるぐらい、現場のことを熟知している方々と共に進めていたわけですから。非常にタフな仕事でしたが、クライアントの熱意に寄り添い、共に創造するというのはこういうことなのかという、大きな喜びを感じさせていただきました。御社のことをより深く理解する助けにもなり、今後も永らくおつきあいさせていただけたらと、心密かに願っていたものです。だから2007年の竣工後、次のプロジェクトにお声掛けいただいた時にはとても嬉しくて、この経験を踏まえて、最高の提案をするぞと意気込んだものでした。

試練と、情熱と、信頼と。 幻の川島計画を巡って

一次のプロジェクトとは、2007年から2009年にかけて計画された「川島計画」ですね。

小林社長 | そうです。当時各地に分散していた生産拠点を集約するため、埼玉県川島町に土地を取得して生産センターをつくらうというプロジェクトで、引き続き大林組に設計・施工をお願いしました。テクニカルセンターよりもさらに大規模かつ複雑な案件でしたが、松岡さんはセンターに入る全部門の担当者に徹底したヒアリングを行って、丁寧に設計を進めてくれました。あの時はいくつぐらい分科会があって、何人ぐらいと話してくれたんでしたっけ？

松岡 | 分科会が8つあり、約70名の方々に協力していただきました。打ち合わせは50回以上やったように思います。しかも小林社長(当時は常務取締役)は、お忙しい中、自らその打ち合わせ全てに立ち会われて…このプロジェクトに賭ける、並々ならぬ意気込みを感じました。

小林社長 | 新しい場をつくるからには、前よりもっと良いものにはなくてはならないでしょう。各担当のヒアリングに立ち会えば、当然その意見の中には、現状への不満や、改善のアイデアといった「より良くなるためのヒント」が見つかるし、トップの判断が必要なら、その場で下せるから効率が良かったんですよ。

松岡 | 現場の方の想いを真摯に受け止めると同時に、その場で改善策を出したり、そこまでは不要だとストップをかけたり、というトップ判断がとても早くて大いに勉強させていただきました。理研計器のプロダクトは、人の命に関わるもの。ミスが許されない、100%のプロダクトをつくらなくてはならないという、皆さんの熱い想いを伺いながら設計をまとめていきました。そんなやりとりを約2年間かけて繰り返し、基本設計が完成して、「よしこれでいこう！」という時に、リーマンショックが起きてしまって…。

小林社長 | 残念ながら、川島町の生産センタープロジェクトは、そこで中断してしまいました。設計自体は本当に良いものができたという手応えがあっただけに、大林組の皆さんには本当に申し訳なかったです。

松岡 | そのお気持ちは、後日聞いていただいた打ち上げで充分に伝わってきました。中止となったプロジェクトの打ち上げを開催していただくなんて聞いたことがありません。プロジェクトに参加した70余名の社員や我々を慰労しようとした小林社長のお気持ちに当社としても、なんとかしてお応えしたいと思ひまして、この打ち上げパーティの壇上で、設計図書一式を社長にお預けしたわけです。



小林久悦 / Hisayoshi Kobayashi

1947年 神奈川県生まれ。
1974年 理研計器株式会社入社。1996年 生産本部製造部長、2003年 取締役執行役員、2009年 常務取締役上席執行役員、2011年 取締役専務執行役員、2013年より、代表取締役社長。

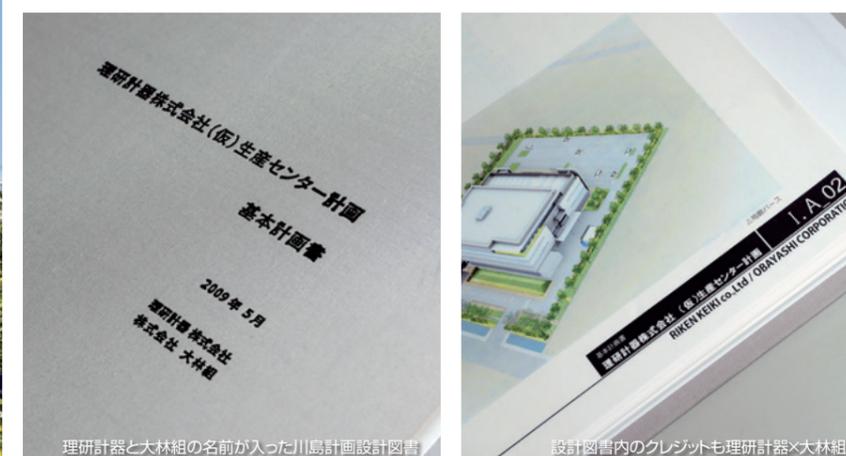
松岡兼司 / Kenji Matsuoka

1974年 愛知県生まれ。
2000年 株式会社大林組入社。入社後は、教育施設・オフィス・研究施設の設計に携わり、2016年より、本社 設計本部 プロジェクト設計部課長。主なプロジェクトに、理研計器の本社テクニカルセンター、開発センター、板橋区小豆沢本社プロジェクト。

2015年度グッドデザイン賞を受賞した開発センターのメインファサード



小林社長の開発センタースケッチ。打ち合わせを重ねて、ファサードが洗練されていった



国内最大の開発・生産拠点 春日部の開発センタープロジェクト始動

春日部開発センターへとつながる、 理研計器×大林組の設計図書

「設計図書さえあれば、施工を他社に頼んでしまってもできます。そういった懸念はなかったのでしょうか？」

松岡 | 少なくとも、私にはありませんでした。実は、お預けした設計図書の表紙には「設計：理研計器株式会社×株式会社大林組」とクレジットを入れさせていただいていました。通常のご依頼なら、当社の名しか入れない部分をあえてダブルネームにしたのは、これは大林組だけのもの

ではない。理研計器の想いを受けて当社がかたちにした、両社がゼロから共創した図面なのだ、という気持ちを込めたかったからです。小林社長なら、きっとこの意味をわかってくさる。そしていつかプロジェクトを再開する時には、必ずまたお声掛けしてください、そう信じていました。

小林社長 | 信頼の証をこんなかたちで託された私としても、感じるものがありましたね。残念ながらこの川島計画は頓挫してしまいましたが、新たな生産拠点は必ず必要なもの。だからいずれまた、一緒にやりましょう。そう松岡さんにはお伝えしていました。

プロジェクト再開のとき

「お互い胸に期するものを抱いての川島計画 終結。それから3年後に動き出したのが、埼玉県春日部の開発センタープロジェクトです。」

小林社長 | 2012年に春日部で土地取得契約がまとまりまして、プロジェクト再開となりました。でも、それ以前にも出物の土地があるとすぐ松岡さんと呼んで「この土地ならどんな建物が建つ？」と尋ねて、簡単な図面を引いてもらっていましたね。なにしろあの頃は、彼しか相談できる人がいなかったから(笑)。

松岡 | おかげで中断中でも、情熱は薄れませんでした(笑)。ですから、春日部プロジェクトが立ち上がったときには、これまで以上のものを共に創りあげるぞと決意を新たにしました。

社員の誇りとなったグッドデザイン

「春日部プロジェクトの進行中、なにか印象に残っているエピソードなどはありますか？」

小林社長 | 川島計画が中断した2009年から、春日部が始動する2012年の間には、東日本大震災が起きるなど、社会情勢が大きく変化しました。そんな変化の中で、人々の命と安心を守るガス検知器の需要や、当社の技術の存在意義が、さらに高まっていることを感じていました。社内からも研究開発と生産の距離が離れていると、ものづくりの一貫性が途切れて効率が悪い、

という声があがりました。そこで、春日部は単なる製造拠点ではなく、研究開発から製造までを一貫して行える、当社最大規模の総合施設にしたいというビジョンを、最初に共有しました。

松岡 | 名称としては開発センターですが、研究・開発・生産・さらには物流や資材調達まで、広範囲な業務を担う施設でしたから、非常に難しい設計になることは覚悟していました。川島計画以上の分科会を実施し、そこでのヒアリングを踏まえて、各部署のゾーニングやボリュームを割り出し、動線を確認…。再び、試行錯誤の日々がはじまりました。

小林社長 | 部署ごとにどれぐらいの面積や設備が必要か希望を出させたら、とんでもなく巨大になりましたからね。それは無理だよ、と各部署をなだめながらプロジェクトを進めていきました(苦笑)。

松岡 | 土地面積、建物の規模、設備や作業効率、動線問題。何度も行き詰まりかけましたが、そんな時、よく小林社長の言葉が、突破口を開くきっかけになってくれたんです。社長のご専門である電気設備関連へのアドバイスはもちろん、コスト削減のためには建物をスケールダウンすべきだというご指摘など、その一言でパッと思考が切り替わり、一気に洗練されたプランニングになった、というターニングポイントが幾度もありました。私が当初こだわっていた、吹き抜けのある縦長の外観などは、設計途中で何度もパースを提示しながら打ち合わせを進めていく中で、社長のご意見を反映して、横長の伸びやかなファサードに変化していきました。後日、この建物はグッドデザイン賞を受賞したのですが、その審査の過程でも特徴あるファサードが高く評価されるポイントとなって、社長の美意識の高さを裏付けていましたね。

『共創』による空間が結実するとき

竣工式で全てが報われた

小林社長 | かなり無理を言いましたが、それも松岡さんを信頼していたからです。コストと稼働予定日の折り合いの中で、本当に良くやってくれたと思っています。

松岡 | ……というような嬉しいお言葉は、設計中にはあまりいただけなかったもので、正直不安な時もありました(苦笑)。でも竣工式の日、社長は壇上で「ありがとう」と力強く握手し、大勢のゲストに社内をお披露目するガイド役を私にまかせてくださったのです。

ご案内中、背後から聞こえる、「良い施設ができました」と談笑する社長の声に、長い年月をかけて共に創造してきたプロジェクトが、ついに完成したのだという実感が湧いて、設計者冥利とはこのことかと、思わず涙が滲みしました。

小林社長 | 私は、社屋や施設というのは企業の成長の証だと思っています。同時に、社員にとってはそこで働くことを誇りに思える場所であってほしいし、お客さまに対しては、こんな会社なら信頼できると感じるシンボルであってほしい。春日部開発センターは、そんな当社の想いに大林組が見事に応えてくれたからこそ創造するこ

とができた施設であり、グッドデザイン賞の受賞も竣工の喜びに花を添えてくれました。

松岡 | 予想以上の反応もありました。開発センターの竣工直前、周辺に大型スーパーがオープンする時期であったにも関わらず、パートの方の求人にも、多くの人材がエントリーしてくれたのです。開発センターの食堂で面接を行ったのですが、面接を受けた方から「絶対にここで働きたい」という声も聞かれ、なかなか集まらないと思われていた定員がすくはいっぱいになったと伺っています。そう思ってもらえる環境をつくることができました。それが本当に嬉しいのです。

ここからまた、次の未来へ

春日部開発センターが紡いだ、さらなる未来。板橋区小豆沢本社プロジェクト

—春日部開発センターは、両者にとってまさに『共創』の喜びを分かちあうことができたプロジェクトとなったわけですね。最後に、春日部に続いて現在進行中の「板橋区小豆沢本社プロジェクト」について、ひと言お願いいたします。

小林社長 | 理研計器株式会社は、1939年に東京都板橋区小豆沢の地に創業しました。宅地開発が進み、都心の地価が高騰して、かつて周辺にあった多くの企業が移転していきましたが、

当社はこの創業の地で、間近に控えた80周年を迎えたい。そう考えて、今、本社の再建プロジェクトを進めています。

本社ビルとは、企業の歴史や成熟度、存在感を象徴する存在であり、合理性や先進性を追求した本社テクニカルセンターや春日部の開発センターなどは、また異なる風格を求められる。そのプロジェクトパートナーにふさわしいのは、誰よりも当社を理解している松岡さんと大林組であると私は確信しています。

松岡 | 施設計画にあたっては、いつも必ず社長から3つのキーワードをいただいています。

- ①部門間の連携強化。
 - ②創造力をかき立て、いきいきと動ける環境。
 - ③理研計器としての存在感。
- これまでのプロジェクトでも求められてきた要素ですが、そこに本社らしさをどう表すべきか。未来に向かってさらに飛躍する理研計器、小林社長と社員の皆さまの想いをかたちにしてお手伝いが再びできることを光栄に思っています。

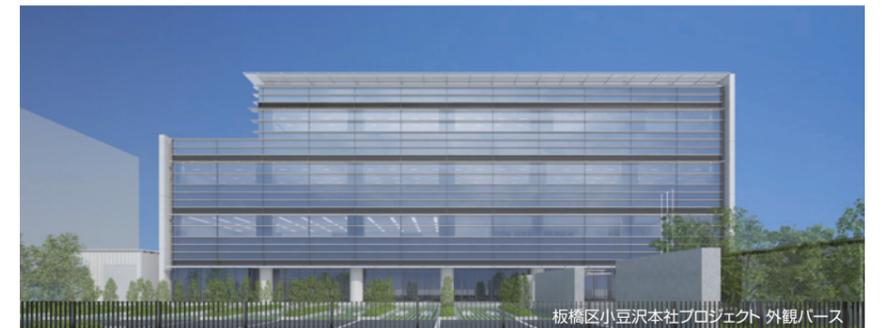
インタビュー：岸本将成 / Masanari Kishimoto
本社設計本部 プロジェクト設計部

堤友紀 / Yuki Tsutsumi
大阪本店 建築事業部 構造設計部

2016年10月12日 本社テクニカルセンターにて



面接が行われた開発センターの食堂



板橋区小豆沢本社プロジェクト 外観パース



板橋区小豆沢本社プロジェクト エントランスパース



板橋区小豆沢本社プロジェクト プレゼンテーション風景